

# 小説は脳内ネコバスに乗っ て

せり～ぬ少納言

例えばあの日チャプター・フォーは、高台のバス停で肩を震わせながら待っていた。停留所名は『スランプに陥った』。雪は止んでいたが、眼前は一面の銀世界である。湖は凍り木々の枝からは、つららがシャンデリアのように垂れ下がり、その向こうにのぞく足跡ひとつない雪原の果てでは、灰白の山が澄み渡る青空を突き刺している。

そこへクラクションを鳴らしながらようやくネコバスが現れた。放屁と思しい排気ガスをモクモクさせてネコバスは停車する。そしてフォーを拾うと、お尻を振ってまた勢いよく走り出す。

車内は暖かく、湿っている。かじかむ手で整理券を引き抜くと、フォーは後部座席で自分を手招くプロローグの隣に座った。二人は友人だ、表面的には。ダッフルコートを脱ごうかまだ着ていようかフォーが迷っているうちに、プロローグがその脇を小突いた。

「ちょっと、見てよ。一番前の席」

そう言って指差した先にはツーが座っている。完璧に整えられたツヤツヤのロングヘア、フルメイク、バッグはグッチ、マフラーはフェンディ、指にはティファニーとカルティエのリング。

「なんか成金っぽくない？ 統一感ないし」

口調からは少なからぬ嫉妬心が見て取れる。ああ、とフォーは曖昧な返事をした。さもなければ、場違いだとか中身もないのにエピローグ気取りだとか、自分のプライドを死守するためのもっともらしい批判を、延々と聞かされる破目になるからだ。フォーは話題を変えようとした。（おそらくネコバス自身の）毛皮を張ったシートで手をこすりつつ、車内を見回して、

「そういえば、スリーは？」

「降りたわよ、『スランプに陥りそう』で。ていうか、そのタートルネック似合うじゃん。かーわいい」

コートを脱ぎにかかったフォーに向かって、プロローグは続けた。

「あなた超スリムだもん、うらやましーい」

無意識的な優越感のなせる口調に少なからず傷ついたが、そんなことないよ、と言ってフォーは作り笑いした。

ネコバスはどんどん、あるいはにやんにやん進んで、ろくろ首の群れる湖畔から真っ白で気絶しそうな森に入った。

フォーは俯いて寝たふりを決めこんでいる。プロローグとのこれ以上の会話を避けるためでもあるし、何より目を開けて（プロローグが落書きして曇りをとってしまった）窓ガラスに映る自分の姿を見ないためでもある。

フォーは容姿に強いコンプレックスがあった。痩せすぎた体、短い睫毛、乾燥したいつも赤い頬と首筋と手。他人の目から見てそれらは特別深刻でなく、むしろフォーの個性として認識されているものだったが、フォー本人にとっては耐え難い苦痛の種だった。それらに対する少々病的なまでの執着が、フォーの性格を必要以上に内気で卑屈に、行動を必要以上に限定的にしていた。

それだから、森の中心部に近い『もうどうにでもなれ』でセブンが乗り込んできてからは、つい薄目を開けてそちらをチラチラ盗み見てしまった。イニシャル入りのダサイセーターにジャージのパンツのセブンは、太っていて、清潔感がなく、「文章」を完全に放棄している。ネコバス

のように退屈で閉鎖的な時空では、器量のより悪いチャプターを見つけて安心するのが一番の暇つぶしなのだ。

もっとも、同時にフォーがそんな自分に対して、激しい自己嫌悪を抱いたことは言うまでもない。フォーは小さく溜息をついた。隣では話し相手に不自由したプロローグが、友人のいないセブンに愛想よく声をかけている。自分より格下と見なした相手に対しては、驚くほどの偽善的優しさを発揮するのだ。二重人格、とフォーは心の中で罵った。程度の差こそあれ、それはフォーも同じなのだが。

ネコバスはもののけ姫のテーマを口ずさみながら、陽気に走り続けている。邪念を振り払うためフォーは空想に耽ることにした。ゴージャスかつナチュラルにセットした巻き髪の自分。細さを絶妙にカバーしている。コーディネートは全体的にモノトーン。差し色の赤をトップスに取り入れることで、顔周りの赤みも目立たなくなるかも知れない。メイクは色よりもシャイニーな質感重視。マスカラの重ね塗りで目元にインパクトを。服装がごくシンプルだから、手元には存在感のあるクロエのバッグを。アクセサリはあえてしないで、香水を品よく香らせよう。乗車した途端、きっとみんなが自分を見つめる。プロローグの悪口の名誉ある対象になり、ツーさえも振り向いて全身を睨む。ネコバスの後を付けてきたマスコミに、降車した途端「章違い」される。「エピローグさん、何か一言を！」「私はチャプター・フォーです、すみません、通して下さい、エピローグではありません」……

おい、ちょっと！ というワンのゾウみたいな声で急に現実に戻された。すぐ前列でファイヴの肩をたたき、何やら窓の外を指して、

「あれエピローグじゃねえ？」

見れば、裸足に穴だらけの服を着て杖をついた山姥みたいなチャプターが、ネコバスの前方から足を引きずってくる。寝たふりも忘れてフォーはファイヴとハモってしまった。

「まさかあ」

ワンはフォーの方を振り返りながら、

「いや、エピローグだよ」

「何言ってるの」

プロローグが割って入ってきた。そして、

「『エピ』がこんな遠くに来るはずないじゃん。私もう何度もお邪魔したけど、駅前の通り沿いに住んでるんだから」

と、得意気に言ったけれど、斜め前で事務的にセブンが肯いただけで、言葉の最後はツーに遮られてしまった。

「でもほら、『完バッジ』つけてるわ」

ツーは片方の手で吊り革に掴まり、もう片方の手で（寝ぼけて転びそうな）シックスの手を引いて、後部座席に近付いて来ている。

『クソ食らえ』にさしかかり、ネコバスが減速した。チャプターたちの言い合いがぱっと止んだ。終章記章（通称『完バッジ』、日本終章連合会貸与）、すなわちエピローグの証かつ誇り。それを確かめようと、こぞって窓ガラスに貼り付いたのだ。

対して渦中の山姥チャプターはネコバスに目もくれない。『クソ食らえ』のずっと向こうを見据えたまま、憑かれたように困難な歩行を続けている。ネコバスが完全に停車した。ドアが開いたのとほぼ同時に山姥チャプターがすれ違った。フォーはハッと息を呑んだ。俄かには信じがたい光景だったが、通り過ぎるボロ服の胸元には、紛れもなく金色の「完」の字が光っている。

「乗せてあげようよ」

とファイヴが憐れむように言った。

「だから『エピ』じゃないってば」

プロローグは頑なになっている。現実と反比例してフォーも激しく肯いていた。初めて心からプロローグの肩を持ちたい気分だった。

「この際どっちでもいいだろ、エピローグだろうとなかろうと」

とワン。

「あのチャプター、放っといたら死ぬぜ？ おい、ネコバス！ そのまま発車しないで待って！」

あいよ、と言ってネコバスはあみんの『待つわ』を歌いだした。開いたままのドアからワン、ツー、ファイヴが駆け降り、山姥チャプターの背中を追っていく。聡明で清麗なエピローグ。いつだって憧れのエピローグ。それなのに！ 絶望的幻滅に耐え切れず、とっさにフォーは叫んでしまった。

「ネコバス！ 発車して！ はやく！」

あいよ、と言ってネコバスはお尻を振った。ドアが閉まる。ソルティー・シュガーの『走れコウタロー』にのせてネコバスが動き出す。異変に気付いたワンが大声を上げる。驚いたネコバスが振り返るが、途端に足を滑らせる。右前足の霜焼けが痛くて踏ん張り損ね、そのまま大きくバランスを崩し一。

車体に打ちつけられ、痛みとおののきの声を上げるフォーらチャプターの目前に、ガードレールと道端のモチモチの木が迫っている。路線図によると、この先『意外と突破口が見えてきた』経路で気絶しそうな森を抜け、かぼちやの馬車が行き交う市街地に入り、角の生えた高島屋と古代のミスタードーナツのある交差点を右折、『やっぱあたし天才かも』でチャプター大量乗車の後、そのまま駅前通りを進んで終点『やった一間に合った締め切り』に到着の予定だが、果たして小説の運命はいかに。